

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

タイトル：「前近代南アジアにおける中間的諸集団の再検討」（平成 24 年度第 3 回研究会）

日時：平成 25 年 3 月 24 日（日曜日）午後 2 時より午後 6 時半

場所：東京外国語大学本郷サテライト 5 階セミナールーム

1. 小谷汪之（AA 研共同研究員）

「前近代インドにおける社会集団——『落ちこぼれた人々』の存在を通して」

はじめに——社会集団の内と外

ある社会集団の性格はその外に存在する人々や、そこから排除された人々の側から見たとき、内側からだけ見ていたのでは見えない側面が見えてくるであろう。本報告では、17・18 世紀のマハーラーシュトラ地方の社会集団の性格を、そこから「落ちこぼれた人々」に視点を据えて考えてみたい。

I 村落共同体の内と外

1 ワタンダール (vatandār) 農民とウパリー(uparī)農民

17・18 世紀のマハーラーシュトラ農村にはワタンダール (vatandār) 農民とウパリー(uparī) 農民という二つの階層の農民が存在した。ワタンダール農民というのは、農民ワタン（百姓株）をもつ、村落共同体の正規の成員で、ウパリー農民というのは農民ワタンを持たず、村の土地を借りて耕作している小作農民である。しかし、この二つの農民階層は截然と区別された、固定的な階層ではなかった。ワタンダール農民が飢饉などで貧窮して、自らの村を出てウパリー農民になることもあれば、逆にウパリー農民がある村の農民ワタンを購入して、その村のワタンダール農民になることもあった。

ワタンダール農民が貧窮して村を出たり、疫病や戦乱のために一家が絶滅すると、そのワタンダール農民の耕地と居住地はガト・クル（絶滅家族ワタン。gata kula, [vatan of] gone family）と称されて、村の管理のもとに置かれた。ウパリー農民はこのガト・クルを村から借りて耕作していたのであるが、ガト・クルを村から購入して、ワタンダール農民になることもあった。例えば、プネー郡マオン村の五人のウパリー農民（スクワスティ農民と称されているが）は 6 ルカー分のガト・クルを 150 ルピーで購入して、この村のワタンダール農民となった (Replies of Captain Robertson to Queries dated 10th October 1821, *Selections of Papers from the Records at East-India House, relating to the Revenue, Police, and Civil and*

Criminal Justice under the Company's Government in India, Vol. IV, pp. 528-529)。村の方としては、税は村請で、村に一括して課されるので、穴のあいてしまったワタンダール農民の後を誰かに埋めてもらったほうが良かったのである。

このように、ワタンダール農民とウパリー農民という二つの階層は、村落共同体の内と外という関係にあったが、両者の関係は決して排除や断絶の関係ではなく、相互依存関係にあったのである。いいかえれば、村の内は村の外の存在があつてはじめて安定的に再生産されていたのである。

II カースト集団の内と外

村落共同体の内と外との関係とは異なり、カースト集団の内と外とは完全な排除と断絶であった。カースト集団から落ちこぼれるのは、貧窮による家の没落やハンセン病に類似した疾患が原因の場合もあったが、多くの場合は何らかのカースト規範を侵犯したことによるカースト追放であった。カースト追放の儀式はガタスポータ (*ghatasphota* 水壺割り) と称され、ガタ (水壺) を壊して水を流出させる儀式が中心をなしていた (『マヌ法典』 11 - 183, 184)。これは葬式の際に行われるのと同じ儀式であるが、それは、カーストからの追放はヒンドゥー法の観点からは、死を意味したからである。

それでは、カーストから落ちこぼれたり、永久に追放された人々はどこに生きる場を求めたのであろうか。ベルニエの『ムガル帝国誌 (二)』 (岩波文庫、105 - 106 頁) には、サティー (寡婦殉死) に失敗したために、カーストから追放されることになる若い女性をさらっていく不可触民の話が出てくる。また、ウエーバーによれば「ボンベイ州の不浄カーストであるバンギー (清掃人) は、部分的に高位カーストの被追放者からなっている」 (深沢宏訳『ヒンドゥー教と仏教』 10 - 11 頁)。たしかに、カーストから落ちこぼれたり、追放された者が不可触民カーストに加わるという可能性はあつたであろうが、17・18 世紀のマラーティー語史料にそのような事例を見出すことはできなかった。史料上で確認できるのは以下の二つのケースである。

1 クンビーン (*kunbīna*) とバティーク (*batīka*) — 「女奴隷」という存在

17・18 世紀のマハーラーシュトラには、クンビーンとかバティークと呼ばれる人々がかなり多数いた。彼女等は「女奴隷」と英訳されているように、自ら身を売ったか、親兄弟に身を売られたかして、転々と売買される存在であった。購入された家では、家事労働に従事するのが一般的だったが、中には「妾」的な存在の人もいたようである。ただ、彼女等が問題になるのは、その出自が不可触民であつたことが露見した場合 (*Selections from Peshwa Daftar, XXXXIII-92, Shiva Charitra Sahitya, II-315, etc*) や彼女等が不可触民や異教徒と関係を持っていたことが明らかになった場合 (*Selections from Satara Rajas' and Peshwas'*

Diaries, I-399, VIII-1125. etc) であった。このような場合、その家の人々には不可触民や罪人とのサンサルガ（近接）の罪が生じたとみなされ、浄め（罪の除去）の儀式を受けることが必要であった。

このクンビーンとかバティークと称された人々は、家を失い、それゆえにカーストからも落ちこぼれて、天涯孤独の生涯を送ったのであるが、それでも、生きる道を求めつづけていたのである。

2 カルワンティーン (kalvantīna) — 「踊り子」とその集団

カーストから落ちこぼれたり、追放された人々が生きるもう一つの道は、「踊り子」（カルワンティーン）となることであった。彼女等是一種の旅芸人集団を成して、町や村の祭礼や結婚式などに呼ばれて、歌や踊りを披露した。しかし、中には、「妾」的な生活を送る者もいた (*Selections from Peshwa Daftar*, XXXXIII-29)。このような旅芸人集団には、カーストから落ちこぼれたり、追放された男性も存在したのであろうが、集団内部の婚姻関係によって集団が維持されるというよりは、カーストから落ちこぼれたり、追放された人々を次々と受け入れることによって集団が再生産される面のほうが大きかったと思われる。いいかえれば、このような旅芸人集団がカーストから落ちこぼれたり、追放された人々の受け皿になっていたのである。

おわりに—社会の隙間に生きる人々

前近代のインド社会は村落共同体といった地縁的共同体とカーストという血縁的共同体を縦横の糸として、極めてリジッドに構成されていたと、一応は、いうことができる。しかし、リジッドであればあるほど、そこから落ちこぼれたり、排除されたりする人々は多かつたであろう。そのような人々は、社会の隙間を見つけて、生きていくほかなかつたのであるが、その隙間のあり方も一様ではなかつた。本報告では、二つの隙間について述べたが、これら以外にもいろいろな隙間があつたと考えられる。

2. 谷口晋吉 (AA 研共同研究員・東京外国語大学)

「ベンガルにおける部族とカースト——一つの歴史的見通し」

この報告の題目は、カーストとは何かという問いと、ベンガル人とは何か、ベンガル文化とは何か、ベンガルらしさとは何かという問いとを重ね合わせた時におのずと浮かんできたものである。

「部族とカースト Tribes and Castes」という問題設定は、「部族からカースト From Tribes to

Castes」という問題設定とはやや異なることにご注意願いたい。カーストも部族もどちらも Jati という言葉で表現され、個々人が生まれおちた家族を囲む集団を意味する。カーストという衣を纏っていても、より古層に属する部族としての生活規範、社会慣行、信仰体系は容易に消滅するものではなく、とくに、カーストとしての所与の地位に不満を抱く人々にとっては、自律的な部族としてのアイデンティティーは貴重な拠り所となり、時を越えて蘇る。その様な現象が近年のインドの辺境で頻発していることに、我々は思いを致すべきであろう。また、この発表の副題を「一つの歴史的見通し」としたのは、古代から今日までのベンガルにおける様々な社会集団の浮沈や相互関係の全体像を、Annapurna Chattopadhyaya の大著を素材として、私なりに提示したいと考えたからであり、個々の部族、カーストに関する個別的論点の追究は他日を期すことにしたい。

この作業により見えて来た全体像を簡単に示そう。ベンガルの最古層の住民は Australoid と総称される東南アジアから海路、陸路ベンガル平野に入った諸部族とヒマラヤ山麓やインド北東部、Myanmar から入った Mongoloid 系の諸部族であった。かれらは、多様なルートを辿って様々な時期に到来し、相互の間に混血を重ねながら融合し、Proto-Bengali とでも表現しうる幾つかの新たな集団を形成した。その様な集団として今日知られている最古のものは、Nishada、Savara、Pulinda、Kirata などである。さらに、そのあとにやや遅れて Dravidian、Aryan が到来し、諸部族・諸集団相互の間にさらに複雑な複合が生じた。このようにして醸成されてきた Proto-Bengali は、初期国家、古代帝国という政治的枠組みが出現するなかで、Radha (Suhma)、Pundra (Varendra)、Vanga、Gauda という今日もよく知られた地域単位へと統合された。これは、核となる特定の血縁的部族集団がそれ以外のさまざまな集団を包摂して地縁化したものと考えられよう。そして、ベンガル地方のバラモン教化が進行するなかで、この大きな土台の中から多数のカーストが形成されることになったと思われる。こうして、さまざまな部族の母斑を残しながらも原ベンガル人が形成され、やがて国家の形成の中で地縁的結合が強まり、そこにアーリヤ化の影響が生じて、諸カーストが形成されていったという道筋を構想することが有用であろう。バラモン教化の始まる前にすでに諸先住部族の間で神々の習合が生じ、一定の共通な宗教世界が形成されていたことを示唆する情報のかけらも見出されるから、インド世界の形成に向けての動きがすでに生じており、それにバラモン教化が被さるという2重のプロセスが想定できることになる。